

<研究報告>

## “Cat in the Rain” の Cat に関する一考察\*

### —なぜタイトルの Cat は無冠詞なのか—

田中 江扶      信州大学学術研究院教育学系

キーワード：無冠詞，定冠詞，場面設定，語の対応関係

#### 1. はじめに

ヘミングウェイの作品には「猫」が多く登場するが、タイトルに猫(cat)が使われているのは、*Cat in the Rain* (『雨の中の猫』)のみである。この作品の中の猫に関しては謎が多く、多くの研究者をひきつけている<sup>1</sup>。中でも、タイトルに無冠詞の Cat が使われていることに多くの関心が寄せられている。以下に、今村 (1990, p.97)からの引用を示す。

そもそも、その不可解さは題名にある。原題は“Cat in the Rain”。原題があるいは“The Cat”と特定の猫をさすか、あるいは“Cats”と、いつそのこと複数形にしてくれていれば、ことは簡単だ。もちろん、そこを明らかにしないところがヘミングウェイの意図したところである。

今村 (1990)は、作品が書かれた背景やヘミングウェイの伝記的事実から、作品の中の「猫」について詳細に論じている。本稿では、そのようなテキスト外の情報ではなく、あくまで作品そのものから得られるテキスト内の情報に基づいて分析を行う。とくに、言語学的視点から、タイトルの *Cat in the Rain* ではなぜ無冠詞の Cat が使われているかを考察し、Cat は妻の叶わぬ願望 (unobtainable desire)を表していると主張する<sup>2</sup>。

#### 2. 言語学的分析

本節では、①無冠詞の意味、②定冠詞の意味、③語彙の使われ方という 3 つの観点から *Cat in the Rain* のテキスト分析を行う。

\* 本稿の執筆にあたって、学部時代に集中講義でこの作品の言語学的分析に関する講義をしてくださった寛寿雄先生(元神戸大学名誉教授)と英文解釈の基礎を教えてくださいました恩師の高槻貞夫先生(元愛媛大学教授)のお二人の講義記録が大変参考になった。お二人からこの拙稿に対してコメントをいただくことがもうできないこと、感謝をお伝えすることができないことを残念に思う。また、英語学特殊演習の授業で、このヘミングウェイの作品の精読を行ったことが、本稿の考察に大いに役立っている。議論を重ねてくれた信州大学英語教育コースの3年生および英語副免の学生たちにも心からの感謝を捧げたい。

<sup>1</sup> 大沼 (1987)は、本作品に関する論文を文学的な論考と言語学的な考察とに分けて6つあげている。

<sup>2</sup> 倉林 (2018, p.85-86)は、テキスト外の情報の重要性を認めながらも、こうしたテキスト外の観点からだけの解釈は「テキスト外に要因となるものを求めるあまり、テキストを形成する言語表現の曖昧性を解明したことにはならない」と指摘している。本稿では、可能な限りテキスト内の分析を試みる。

## 2.1 無冠詞の意味

*Cat in the Rain* では、通常、無冠詞で使われることがない普通名詞の *cat* が無冠詞で使われている。しかし、普通名詞が無冠詞で使われているタイトルはほかにもある。たとえば、以下のようなものがある<sup>3</sup>。

*Big Two-Hearted River* 『二つの心臓の大きな川』

(cf. cross **the river**, swim across **a river**)

*Banal Story* 『陳腐なストーリー』

(cf. **the official story**, **a false story**)

*Old Man at the Bridge* 『橋のたもとの老人』

(cf. **the old man**, **an old man**)

これらもタイトルに普通名詞が無冠詞で使われているにもかかわらず、*Cat in the Rain* ほど注目を浴びていない。しかし、これらはタイトルに無冠詞の普通名詞が使われる場合に何を表すかを探る大きな手掛かりになるといえる。とくに、最後の作品 (*Old Man at the Bridge*) の無冠詞 *old man* は注目に値する。なぜなら、以下に示すように、ほかにもタイトルに *old man* が使われている作品があるが、無冠詞では使われていないからである。

*The Old Man and the Sea* 『老人と海』

*My Old Man* 『ぼくの父』

ここでは、とくに *Old Man at the Bridge* と *The Old Man and the Sea* の比較に焦点を当てると、光富 (2016, p.131)は両作品を次のように論評している<sup>4</sup>。

*The Old Man and the Sea* の *Santiago* もサメに打ちのめされながらも気力を失うことはない。... (中略)... まだ生き続けようという意欲が感じられるのに対し、“*Old Man at the Bridge*”の老人には生きようという意思が感じられない。...(中略)... このように“*Old Man at the Bridge*”の老人には他の Hemingway 作品の老人とは異なり、生気が感じられず、この作品ではファシストの暴力によって無気力にされてしまう老いの負の側面が描かれている。

上の論評でとくに注目すべきことは、定冠詞の *the* が使われている *The Old Man and the Sea* の老人は「困難な中でも生きようとする前向きさ」があるのに対して、無冠詞の *Old Man at*

<sup>3</sup> *The complete short stories of Ernest Hemingway* より抜粋。なお、タイトルの邦訳は『ヘミングウェイ全短編』(高見浩 訳)より。

<sup>4</sup> 光富 (2016)では、「老人」が出てくる作品として *A Clean, Well-Lighted Place*(『清潔で、とても明るいところ』)なども取り上げているが、ここでは *The Old Man and the Sea* との比較に焦点を当てる。

*the Bridge* の老人は「困難によって生きる気力を失った無気力さ」しかないことである。上の光富 (2016)の言葉を借りれば、無冠詞の *Old Man* には「負の側面」しかない。このことから、ヘミングウェイの作品では、タイトルで普通名詞が無冠詞の場合、「負の側面」を意味するシンボル（象徴）となっている可能性がある。よって、以下の仮説を立てる。

(1) *Cat in the Rain* の無冠詞の *Cat* は、「負の側面」を意味するシンボル（象徴）である。

次に、無冠詞の普通名詞が意味するところを言語学的にみていくことで、(1)の仮説（とくに「無冠詞の *Cat* がシンボルである」こと）の妥当性を示す。伊藤 (2014)は、冠詞や複数形の *s* がつかない *dog* を「裸の単数形」とよんでいる。そして、『英和活用大辞典』には 100 以上の *dog* が使われている例が載っているが、裸の単数形の *dog* はほぼ出てこないことを指摘している。たとえば、伊藤 (2014, p.40)では以下のような例があげられている<sup>5</sup>。

**beat [hit] a dog, breed dogs, feed a dog, The dog barked at the stranger, My dog scratched itself**

一方で、図鑑に載っている犬の絵の見出しには、裸の単数形の *dog* が使われないといけなことから、伊藤 (2014, p.44)は裸の単数形の *dog* はイヌの「概念図」を表すとしている。

では、図鑑のイヌの絵は何を意味しているのか。1つ確かなのは、この絵はこの世のどこかにいる 1 匹のイヌを指してはいないことだ。... (中略)... 図鑑を買い与える親は、図鑑のイヌの絵を見たわが子が、あらゆるイヌをそれと見分けられることを期待しているのだ。そしてそう考えると、図鑑のイヌの絵の意味は明らかだ。その絵は「イヌとはこのようなものだ」ということを教えるイヌの「概念図」なのだ。

この伊藤 (2014)の指摘で重要なことは、裸の単数形（＝無冠詞）の *dog* は「具体的なイヌを指さない」ということである。そのため、「概念」であることになるが、これは無冠詞の *dog* は抽象的であることを意味している。抽象的であるがゆえに、何かを表すシンボルとしても使えることになる。次の例をみてみよう（『現代英語冠詞事典』(p.70)より引用）。

(2) **People can fall in love with a cute puppy, then find out six months later that they got more dog than they bargained for – or one whose personality is different from what they imagined.**

(かわいい子犬が気に入ったものの、6 か月後には、予期していた以上のイヌを、あるいは思っていたのとは違う性格のを、買ってしまったことに気づくことがある。)

<sup>5</sup> 「イヌの肉」を意味する場合は、無冠詞の *dog* が使われる (cf. **we don't eat dog.**)。その場合は、普通名詞ではなく物質名詞的に扱われているといえる (cf. **Eat less meat and more fruit.**)。

(2)の *more dog* では無冠詞の *dog* が使われているが、この *dog* はイヌの性格を表している。つまり、具体的なイヌではなく「イヌ性」のようなものを表しており、「かわいい(cute)と思っていたが、予期に反してイヌらしさ（どう猛さなど）もある」ことに気づいたという意味になる。このように、「イヌ性」を表す無冠詞の *dog* は、そこから「(イヌのような)どう猛さ」といった抽象概念のシンボルになれるのは自然なことである。同様のことが、無冠詞の *cat* にも当てはまる。*Cat in the Rain* では、無冠詞の *Cat* は具体的なネコを指しているのではなく、抽象的なものを意味するシンボルとして使われているといえる。

## 2.2 定冠詞の意味

*Cat in the Rain* では、無冠詞の *Cat* は *in the Rain* という前置詞句をとともなう。この前置詞句の *the Rain* には定冠詞の *the* が使われている。本節では、この定冠詞の *the* について考察する。まず、Carter (1982)は *Cat in the Rain* の中に定冠詞の *the* が多く使われていることが印象深いとした上で、最初の比較的短いパラグラフに *the* が 27 回も出てくることを指摘している<sup>6</sup>。その上で、このような *the* の用いられ方は読者に「なじみ深さ (familiarity)」をもたらす効果があると指摘している。

It is a familiarity which comes in a way from knowing what is referred to. Particularly in encountering 'the hotel', 'the room facing the sea', 'the beach', 'the bright colours of the hotels facing the gardens and the sea', the 'palms...in the public garden' I feel I am faced with a typical scene ... (中略)... It is as if Hemingway is saying that such a setting is something that we all know so well.

つまり、*the* を繰り返すことで、「よくポストカードなどでみかける典型的なリゾート地」であるといった印象を読者に与えることになる。

しかし、タイトルの *the Rain* に使われている定冠詞の *the* は、このような「馴染み深さ」を表すためのものではない。なぜなら、*Cat in the Rain* では雨は場面を変えるために使われているからである。最初のパラグラフに書かれている一場面をみてみよう (太字は筆者)。

In the good weather there was always an artist with his easel. Artists liked the way the palms grew and the bright colors of the hotels facing the gardens and the sea. Italians came from a long way off to look up at the war monument. It was made of bronze and glistened in the rain. **It was raining.** The rain dripped from the palm trees.

<sup>6</sup> Carter (1982, p.68)では、以下のように述べられている。

I am struck here above all by a preponderance of the definite article. 'The' occurs twenty-seven times in that relatively short paragraph.

ここでは、進行形が使われている *It was raining* の前後で場面の切り替えが起こっている。具体的にいうと、それ以前の描写では、通常の光景が描かれているといえる。たとえば、*It was made of bronze and glistened in the rain.*においては、*in the rain* は「雨が降るといつも」というように読める。しかし、その直後に *it was raining* が続き「雨が降っていた」ことを表すことで、一気に場面が物語の一場面に移る。つまり、ここでは「雨」が場面の切り替えを行っている。この点について、Carter (1982, p.75)は次のように述べている<sup>7</sup>。

The reference to the war monument which ‘glistened in the rain’ tends to be read as ‘whenever it rained’. ... (中略)... The sentence which follows, ‘It was raining’, deflates these expectations. We suddenly realise the artists and the good weather are absent.

このように、*Cat in the Rain* の *the Rain* は「いつもの馴染みの雨」という意味ではなく、物語の場面設定に深く関わる要素と捉えられる。つまり、この場合の *the* は Carter (1982)が指摘する *familiarity* を表しているのではないといえる。では、この *the* は何であるか。織田 (2007)は、*the* には「ある集合内 (*class members*)から特定のものを選び出す」働きがあることを指摘している。これを「集合内の特定化」とよぶ。次の対比をみてみよう。

(3) a. The accident happened *in the morning*.

b. The accident happened *on the morning* of the wedding. (織田 (2007, p.100))

(3a, b)ではともに *the morning* が使われているが、両者では *the* の働きが異なる。まず、(3a)は事故が「昼でも晩でもなく朝」に起こったという意味を表す。つまり、(3a)の *the morning* の *the* は1日を構成する[朝昼晩]のうち「朝」を選び出す働きをしている。これに対して、(3b)は事故が「よりによって結婚式の朝に」起こったという意味を表す。つまり、(3b)の *the morning* の *the* は数ある朝の中から「結婚式の朝」という特定の朝を指し示す働きをしている。この点に関して、織田 (2007, p.100-101)は以下のように述べている。

‘on the morning of...’のほうが、数ある朝の中から「その朝」と、より指示詞に近い形で、特定のメンバーの朝 (*a particular morning*)を指示しているのに対して、‘in the morning’のほうは、ある1つの部分集合{朝, 昼, 晩}の中から特に「朝」という部分構成要素を取り出し、「この朝の部分において」と言っているのである。

<sup>7</sup> この点に関して、今村 (1990, p.99)でも同様の指摘がされている。

描写は日々変わらぬ公園と記念碑の情景から、物語時間の雨の情景にするりと入れ代わっている。というのは、雨に濡れる戦争記念碑の描写は、雨の日に見られる普遍の描写でありながら、次の「雨が降っていた」という表現が明らかに物語時間である特定の時間となっていることにより、雨の中に光っている記念碑の描写は普遍と特定の、いずれともとれるからである。

このように、(3a)の the は「集合内の特定化」を示すものであり、(3b)のような1つのものを特定する the とは区別される<sup>8</sup>。そして、(3)においては、両者の区別は異なる前置詞 (in と on) が用いられていることにも反映されている。

ここで重要となるのは、この「集合内の特定化」を表す the は、ある要素を際立たせる効果を示すことである。たとえば、‘in the dark’では「明」と「暗」が対照され、「明 (the light)」の部分背景化することで「暗」が前面に出される (=際立つ)。同様のことが、次の文にも当てはまる。

(4) Come on! Don't play in the rain. (織田 (2007, p.124))

(4)の in the rain では、「雨の降っているところ」と「雨が降っていないところ」が対照され、「雨が降っていないところ」を背景化することで、「雨が降っているところ」を際立たせている。このような the の働きに関して、織田 (2007, p.124; 太字は筆者)は以下のように述べている。

.... 目撃状況下にある発話の場面空間を2つの部分に分割、対照し、他を背景とすることによって、**特定の場の指示同定を対比的に遂行する**。

つまり、(4)の in the rain の the は「特定の場面を対比的に示す」という働きがある。事実、(4)は「**雨の中では遊ぶな**」といているのであり、「雨が降っていない屋内なら遊んでいい」ことになる。

同様のことが、*Cat in the Rain* の the Rain にも当てはまるといえる。上述したように、この場合の the Rain は「いつもの馴染みの雨」という意味ではなく、物語の場面設定に深く関わる要素であるといえる。そのため、この the Rain の the は「雨が降っていない場所」を背景化することで、「雨が降っている場所」を際立たせているといえる。つまり、「雨の中」であることが重要となってくる。よって、以下の仮説を立てる。

<sup>8</sup> (3b)のような1つのものを特定する the は、一般文法書にも載っている通常の the の働きであり、話し手と聞き手の両方が知っているものに対して使われる。なお、このような the は前の文脈や本文 (=テキスト) に出てきているもの指す「**テキスト内同定 (endophoric reference)**」と、一般常識や場面状況から特定できる「**テキスト外同定 (exophoric reference)**」に分けられる (畠山編 (2017)など参照)。

(i) a. His car struck **a tree**; you can see the mark on **the tree**. [テキスト内同定の the]

(彼の車が木に衝突して、その木についた跡がまだ見えます。)

b. Please pass **the wine**. (=the wine on the table) [テキスト外同定の the]

(ぶどう酒 [その場のテーブルにある(場面状況)]を回してください。)

(Thomson & Martinet (1988, p.19); 太字とイタリックは筆者)

なお、Carter (1982)では、the の「テキスト内同定/テキスト外同定」という観点から、*Cat in the Rain* における文の結束性 (cohesion)を分析している。

(5) *Cat in the Rain* の無冠詞の Cat は、「雨の中」という場面と深く関係している。

## 2.3 語彙の使われ方

*Cat in the Rain* では、語彙の使われ方に特筆すべき点がある。それは、登場人物である **wife** と **cat** だけ違う語彙が使われることである。具体的にいうと、**wife** が **girl** と書かれたり、**cat** が **kitty** と書かれたりする<sup>9</sup>。本節では、それぞれの単語がどのような使われ方をしているかをみていく。

まず、**Kitty** の使われ方の特徴をまとめると、次のようになる（各特徴の下に小説の関連箇所を記している）<sup>10</sup>。

### 《kitty の使われ方》

(i) **kitty** はアメリカ人妻のみが使っている。

a. ‘I’m going down and get that **kitty**,’ the American wife said.

‘I’ll do it,’ her husband offered from the bed.

‘No, I’ll get it. The poor **kitty** out trying to keep dry under a table.’

b. ‘Yes, –’ she said, ‘under the table.’ Then, ‘Oh, I wanted it so much. I wanted a **kitty**.’

c. ‘I wanted it so much,’ she said. ‘I don’t know why I wanted it so much. I wanted that poor **kitty**. It isn’t any fun to be a poor **kitty** out in the rain.’

d. ‘I want to pull my hair back tight and smooth and make a big knot at the back that I can feel,’ she said. ‘I want to have a **kitty** to sit on my lap and purr when I stroke her.’

‘Yeah?’ George said from the bed.

‘And I want to eat at a table with my own silver and I want candles. And I want it to be spring and I want to brush my hair out in front of a mirror and I want a **kitty** and I want some new clothes.’

(ii) **kitty** は外（＝雨の中）にいる猫を指す。

a. ‘No, I’ll get it. The poor **kitty** out trying to keep dry under a table.’ (cf. (ia))

b. ‘I don’t know why I wanted it so much. I wanted that poor **kitty**. It isn’t any fun to be a poor **kitty** out in the rain.’ (cf. (ic))

<sup>9</sup> この点に関して、文学的な解釈もなされている。たとえば、大沼（1987, p.88）では **kitty** という幼児語を使うことで、アメリカ人妻の「小児性とか感情面での不安定性といったものを読者が推論することを可能にする」と述べている。さらに、大沼（1987, p.89）はアメリカ人妻に対して **girl** が使われることに関しては、以下のように指摘している。

この女性の **girl** という名詞を使ってもおかしくないような属性が、彼女のおっтоに対する不満、おっтоの彼女に対する不満、彼女のネコに対する執着等々といったものの基底にあるのではないかと考えられることになる。そして、こうしたものは、文学的な観点からすれば、この短篇の意義を考えていく上でかなり重要なはたらきをすることになるように思う。

このような文学的な解釈も可能であるが、本稿では言語学的な観点からの分析を試みる。

<sup>10</sup> これ以降の小説の引用において、太字や下線は筆者によるものである。

(i)の点については、アメリカ人の夫が常に **cat** を使っていることと対照的である。また、(ii)についても、小説の最後に部屋に連れてこられた猫に対しては **cat** が使われている (**a big tortoiseshell cat**)ことと対照的である<sup>11</sup>。以上のことをまとめると、次のようになる<sup>12</sup>。

(6) **kitty** はアメリカ人妻が、外 (=雨の中) にいる猫を指すときのみ使われる。

次に、**wife** と **girl** の使われ方についてみていく。

#### 《**wife** の使われ方》

(iii) **wife** が使われるのは、アメリカ人妻がホテルにいる場合に限られる。

a. The American **wife** stood at the window looking out. Outside right under their window a cat was crouched under one of the dripping green tables.

b. The **wife** went downstairs and the hotel owner stood up and bowed to her as she passed the office. His desk was at the far end of the office. He was an old man and very tall.

*'Il piove,'* the **wife** said.

c. His **wife** was looking out of the window. It was quite dark now and still raining in the palm trees.

d. His **wife** looked out of the window where the light had come on in the square.

(iv) **wife** が使われるのは、アメリカ人妻が欲しいもの／好きなものを見ているときである。

a. 'I'm going down and get that kitty,' the American **wife** said.

b. He stood behind his desk in the far end of the dim room. The **wife** liked him.

(iii)にあるように、**wife** が使われるのはアメリカ人妻がホテルにいる場合である。とくに、アメリカ人妻が窓の外を見ている (look out of the window)場合に **wife** が使われている ((iii)a, c, d))。また、(iv)にあるように、アメリカ人妻が欲しがっている猫を見ているとき ((iv)a)や、好意を寄せているホテルオーナー(the hotel owner)と会っているとき ((iii)b, (iv)b))にも **wife** が使われている。以上のことをまとめると、次のようになる。

(7) **wife** はアメリカ人妻がホテルにいて、欲しいもの／好きなものを見ている場合にのみ使われる。

一方、**girl** は **wife** とは対照的な使われ方をしている。

<sup>11</sup> 今村 (1990)などでも扱われているが、小説の最後にホテルのメイドが連れてきた猫が、アメリカ人妻が見つけた雨の中の猫と同じかどうかについては、多くの研究者の間で論争になっている (栗原 (2007)や坂田 (2015)なども参照)。

<sup>12</sup> (ib)や(id)にある I want(ed) a kitty.の a kitty は any kitty を指すともいえるが、あくまで雨の中の猫を見た上での発言であるため、ここではそのような場合も雨の中にいる猫を指すと考える。



### 《girl の使われ方》

(v) girl は、アメリカ人妻がホテルの部屋にいない場合に使われる。

- a. With the maid holding the umbrella over her, she walked along the gravel path until she was under their window. The table was there, washed bright green in the rain, but the cat was gone. She was suddenly disappointed. The maid looked up at her.

‘Ha perduto qualche cosa, Signora?’

‘There was a cat,’ said the American **girl**.

- b. ‘Come, Signora,’ she said. ‘We must get back inside. You will be wet.’

‘I suppose so,’ said the American **girl**.

- c. They went back along the gravel path and passed in the door. The maid stayed outside to close the umbrella. As the American **girl** passed the office, the padrone bowed from his desk. Something felt very small and tight inside the **girl**.

(va, b)では「傘を差している (holding the umbrella)」ことや「中に戻ろう (We must get back inside)」と言っていることから明らかなように、アメリカ人妻はホテルの外にいる。また、(vc)では「オフィスを通り過ぎる (passed the office)」とあることから、アメリカ人妻はホテルのフロントにいる。これらの場合にのみ、girl が使われていることから、girl の使われ方は次のようになる。

- (8) girl はアメリカ人妻がホテルの部屋にいない場合にのみ使われる。

以上のように、本節では①無冠詞の意味、②定冠詞の意味、③語彙の使われ方という3つの観点から *Cat in the Rain* のテキスト分析を行った。そして、①と②の観点から以下の仮説を立てた。

### 《Cat に関する仮説》

- (1) *Cat in the Rain* の無冠詞の Cat は、「負の側面」を意味するシンボル（象徴）である。

- (5) *Cat in the Rain* の無冠詞の Cat は、「雨の中」という場面と深く関係している。

また、③の観点から、以下のような語の使われ方がされていることを示した。

### 《語の使われ方》

- (6) kitty はアメリカ人妻が、外（＝雨の中）にいる猫を指すときのみ使われる。

- (7) wife はアメリカ人妻がホテルにいて、欲しいもの／好きなものを見ている場合にのみ使われる。

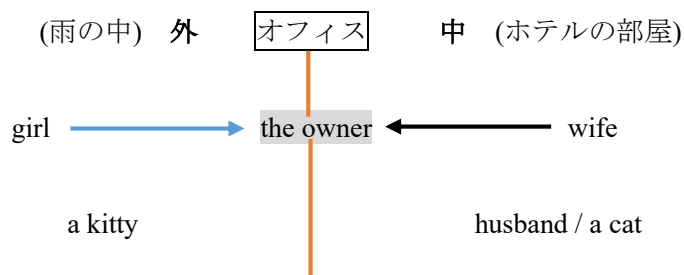
(8) girl はアメリカ人妻がホテルの部屋にいない場合にのみ使われる。

これらのことを踏まえ、次節では *Cat in the Rain* の無冠詞の Cat が妻の叶わぬ願望 (unobtainable desire) を表していることを示す。

### 3. 無冠詞の Cat の分析

*Cat in the Rain* の場面設定は、大きく 3 つに分けられる。1 つはアメリカ人夫妻がいるホテルの 2 階の部屋 (Their room was on the second floor) であり、もう 1 つは雨が降っているホテルの外 (in the rain) である。そして、この 2 つの場所をつなぐのは、ホテルオーナーがいるホテルのオフィス (the office) である。アメリカ人妻は、必ずこのホテルのオフィスを通してホテルの外に行くため、ホテルのオフィスは外と中をつなぐ役割をしているといえる。この 3 つの場面に、(6)~(8) の語の使われ方を対応させると次のようになる。

#### (9) 3 つの場面と語の対応関係



まず、(6)より kitty は「雨の中にいる猫」を指す。次に、(8)より girl はホテルの外からオフィスまでの間で使われる。一方、(7)より wife はホテルの部屋からオフィスまでの間で使われる。なお、(9)にはアメリカ人の夫 (husband) が出ているが、この夫は部屋のベッドから動かないままである。以下、小説から関連箇所を示す<sup>13</sup>。

- 'I'll do it,' her **husband** offered from the bed.
- The **husband** went on reading, lying propped up with the two pillows at the foot of the bed.

また、アメリカ人の夫は「猫」に言及する際に cat を使っている。以下、小説から関連箇所を示す。

<sup>13</sup> 小説の後半では、このアメリカ人の夫は George という名前で登場しているが、最後までベッドから動かないままである。以下、小説から関連箇所を示す。

- **George** was on the bed, reading.
- **George** shifted his position in the bed.
- 'Yeah?' **George** said from the bed.

- ・ **George** was on the bed, reading.

‘Did you get the cat?’ he asked, putting the book down.

さらに、(6)にあるように、アメリカ人妻しか **kitty** を使わないため、(9)では **a cat** を **husband** の横に置いている。

次に、(9)と前節でみた **Cat** に関する仮説を基に、タイトルの無冠詞の **Cat** が何を表しているかを考察する。まず(5)の仮説から、無冠詞の **Cat** は、「雨の中」という場面と深く関係している。ここで、(9)にあるように、雨の中(=外)と関係する語は **kitty** であることから、無冠詞の **Cat** は **kitty** と関係している。そして、小説の中での **kitty** の位置づけはアメリカ人妻の願望の1つである。以下、小説から関連箇所 (2.3 節の(id))を示す。

‘I want to pull my hair back tight and smooth and make a big knot at the back that I can feel,’ she said. ‘I want to have a **kitty** to sit on my lap and purr when I stroke her.’

‘Yeah?’ George said from the bed.

‘And I want to eat at a table with my own silver and I want candles. And I want it to be spring and I want to brush my hair out in front of a mirror and I want a **kitty** and I want some new clothes.’

上記では、**want** が8個も使われていることからわかるように、アメリカ人妻の願望が複数述べられている。そして、その願望の1つに **kitty** がある。この点に関して、倉林 (2018, p.135)は以下のように述べている。

まず注目すべき点は、“I wanted”の反復である。発話の主体である彼女に子供っぽさを読み取ることができるだろう。... (中略)... そして、“want”の対象は猫、食器類であったり、髪の毛を伸ばすことである。これらは、結婚生活において、彼女自身が手に入れることができなかつたり、実現しなかつたものが列挙されていると考えられる。

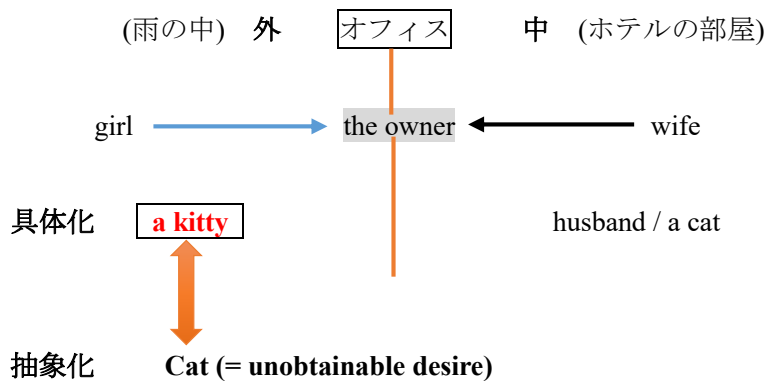
つまり、**kitty** は「猫」を表しているというよりも、アメリカ人妻の願望を表している。そのため、**kitty** は一見無関係なろうそく (**candles**)や新しい服 (**new clothes**)などと並列されている。

さらに、上の引用にあるように、アメリカ人妻の願望は「彼女自身が手に入れることができなかつたり、実現しなかつたもの」である。つまり、手に入れられない叶わぬ願望 (**unobtainable desire**)を表している。この点を(1)の「無冠詞の **Cat** は、「負の側面」を意味するシンボル (象徴) である」という仮説から捉えると、まさに無冠詞の **Cat** が表す「負の側面」は「願望が叶わない」ことであるといえる。また、無冠詞の **Cat** が表すシンボルとは「アメリカ人妻の願望」と捉えられる。よって、以下の結論が得られる。

(10) *Cat in the Rain* の無冠詞の Cat は、アメリカ人妻の叶わぬ願望を表している。

この結論に基づくと、小説の中に出てくる kitty は、無冠詞の Cat (=叶わぬ願望) が具現化したものと捉えられる。このことを、(9)を使って示すと、次のようになる。

(11) 無冠詞の Cat が示すもの



つまり、概念化した無冠詞の Cat (=unobtainable desire) が具現化したものの1つが a kitty となる。この願望はアメリカ人妻の願望であるため、a kitty はアメリカ人妻だけが使う語となっている。また、この願望は叶わぬもの (=負の側面) であるため、a kitty は「雨の中 (in the rain)」というネガティブな状況にいる猫に使われるといえる。さらに、アメリカ人妻の願望を表す a kitty をホテルの中から羨望のまなざしで見ているのは wife であり、実際に a kitty を求めて行動しているのは girl という対比も捉えられることになる<sup>14</sup>。

#### 4. まとめ

ヘミングウェイの文体的な特徴として、可能な限り文を削ぎ落して簡潔に表現することがあげられる。これは、全体の八分の一しか姿を現さない氷山に譬えられ、「氷山の一角理論」とよばれる。この「氷山の一角理論」のもととなったのが、*Death in the Afternoon* (『午後の死』) の次の箇所である (太字は筆者；訳は今村 (2005) より引用)。

<sup>14</sup> 畠山雄二氏と本田謙介氏から、本分析が正しいとすると、本作品における無冠詞の Cat は文法と文体をつなぐインターフェイスの例であると考えられるというご指摘を頂いた。

① 一般に無冠詞の名詞は何らかのシンボルを表すことができる。【文法の役割】

② 本作品では、*Cat in the Rain* の Cat が「負の側面」を表すシンボルとなっている。【文体の役割】

つまり、文法としては①のような規定があり、文脈 (コンテキスト) によって②が付加され则认为られる。また、無冠詞の Cat は《範疇無指定》の要素であるため、この《範疇無指定》をルート(√)で表すと、√CAT と表示できることも指摘された。通常、√CAT はこのままの形では具現化できず、冠詞や複数形語尾などをとともなが、それらをあえてともなわず√CAT のまま具現化しているのが今回の例だといえる。

If a writer of prose knows enough of what he is writing about he may omit things that he knows and the reader, if the writer is writing truly enough, will have a feeling of those things as strongly as though the writer had stated them. The dignity of movement of an ice-berg is due to only one-eighth of it being above water. A writer who omits things because he does not know them only makes hollow places in his writing.

(もし作者が自分の書いていることを充分に知っていて、分かっていることを省略しても、本当のことを書いているかぎり、読者は作者が書いたのと同様、強い印象を受けらるだろう。氷山の動きに威厳があるのは、それが水面に八分の一しか現れていないからである。知らないからといって省略すると、作品の中に空白が生まれるだけだ。)

ここで重要なのは、省略した部分を単に読者の想像に委ねているわけではないということである。上の引用にあるように、「省略されていてもあたかも書かれているかのように読者に分かる」ということが、「氷山の一角理論」の重要なポイントである。言い換えれば、書かれている部分(=氷山の一角)をみれば読み取れるといえる。この点に関して、今村 (2005, p.172)も「読者は書かれた部分から隠された意味を自ら知ることになる」と述べている。このことは、テキストの言語学的な分析が文学的解釈を理解する上でも有効であることを示している。実際、Carter (1982)や倉林 (2018)などでは、言語学的な分析方法を基に、ヘミングウェイの作品の文学的解釈を追求している。たとえば、倉林 (2018, p.106)は次のように述べている<sup>15</sup>。

本章では、文章の隙間を読み取るということは極力避け、そこに書かれた文字を頼りに読み解くためには、客観的に説明を可能にする言語学的な手法が必要であることを示してきた。... (中略)... 言語学の観点からの作品研究、すなわち、文体論研究は、直観によることの大きかった文学作品の読みの精度を向上させる道具のひとつになりうるだろう。

本稿では文体論ではなく、冠詞というより文法的な観点からヘミングウェイの *Cat in the Rain* の分析を行った。文学研究と言語学の両者がともに補い合う相互補完的な分析により、文学的解釈の精度がより向上していくと考えられる。

<sup>15</sup> 倉林 (2018)では、文体論だけでなく冠詞のような文法項目からの分析も行っている (たとえば、5章の「定冠詞と不定冠詞から作品を解釈する試み」を参照)。なお、Carter (1982, p.73)も言語学的な検証から得られる証拠(the evidence available from a linguistic examination)の必要性を主張している。

At all events, we should not be in a position to approach answers to the questions raised above *without* the evidence available from a linguistic examination of aspects of nominal and verbal group structure.

例文引用文献

*The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*, the Finca Vigía edition.

『ヘミングウェイ全短編』高見浩 訳, 新潮文庫.

*A Practical English Grammar* (Fourth edition), Thomson, A. J. and A. V. Martinet, Oxford University Press.

『[例解] 現代英語冠詞事典』樋口昌幸 著, 大修館書店.

参 考 文 献

Carter, Ronald. (1982) "Style and Interpretation in Hemingway's 'Cat in the Rain'," *Language and Literature: An Introductory Reader in Stylistic*, ed. by Ronald Carter, 65-80, London: Allen & Unwin.

畠山雄二 (編) (2017) 『最新理論言語学用語事典』東京：朝倉書店.

今村楯夫 (1990) 『ヘミングウェイと猫と女たち』東京：新潮社.

今村楯夫 (2005) 『ヘミングウェイの言葉』東京：新潮社.

伊藤笏康 (2014) 『逆転の英文法：ネイティブの発想を解きあかす』東京：NHK 出版.

倉林秀男 (2018) 『言語学から文学作品を見る－ヘミングウェイの文体に迫る－』東京：開拓社.

栗原裕 (2007) 「Cat in the Rain：なにが曖昧か」『大妻女子大学紀要』39, 217–228. 大妻女子大学.

光富省吾 (2016) 「"Old Man at the Bridge" における老い」『福岡大学人文論叢』48 (1), 119–132. 福岡大学.

織田稔 (2007) 『英語冠詞の世界：英語の「もの」の見方と示し方 (2刷)』東京：研究社.

大沼雅彦 (1987) 「雨のなかのネコ」の文法的一面『日本語学』6, 83-92, 東京：明治書院.

坂田雅和 (2015) 「"Cat in the Rain"に潜む不安定さとそれが内包するもの」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』43, 109–118. 佛教大学.

(2019年11月 1日 受付)

(2020年 3月 6日 受理)